[illegible]

世あつてこ
とつふ去ハ
一休和尚の
述作にて
禅宗乃
法つと
旅へなり
よのなり
されハ禅
宗とハ禅
定を略
して性
禅と斗り
いふ禅宗

きこえし比とせを過んするをもあさけりとも絶への
羽衣よなふ万せいまし海せりとみりうへ
見れ見てもひゆしくなりぬすこしの
きしのひめまついく世をぬらん
免なしもちくさる清井て海しさせ
うそしくみれ人たちのさとりとやらんいふ
るすとらされなりひはしめふ父母もなきかと
つといせんのわつかをなかそのそりへきう
嫌ひいふなふとしてえるぬるすりかーさる
色くろやおくへんてりそなきさその成りとた

高木家藏

又座禅
の公あり
又佛心宗
ともいふ
なれハこく
さとれく坐
れしへゆふ
そのおうら
とゆく
ねらえを
つし

是好へしたとへをもよし聖ろつせの花をみら
いろくうされてちりてみもゆゝ乃やうか
う絶系りこし
ならひらいをなふいうしへのまれなきを
たう称く此さもなふもまをなし
花中のふかのたうせめふりやなきを
人をならけりなるもかとめし
ゆくみそりのそうくまかもりのきを
ほとききとさのむひとののちの世
たへもいりすとを称をいをぬる海波の

おころのうちにもなふかのある趣き
うきつなきおくえりれ侍るそのなしを
なれる侍くれたやういうくせん
世の中の人のおこれほとあなきを
たやりやあみさのりれまさきのぬ
あくらくを浅おくも三ぬおもひて
ひまれぬされのそのとなる色し
人たぬらといななやさもしうの見もしの前
てなくするとこへし又もなくなるすしてた
ましぬといふ極の来世とやらんを伴ぬあう

はうはしやうん酒盛りてよまつまなししや
もまそしはく我見ところうゑのちやうり
はきそしとさて於ふは見せてあれうとのさい
人多りうしやくせしとりふ時分のむり
とのうう出とってうきそつまふわしそ又
見ますてひく人乃浮かなしてしやもまくはえ
入於もきほとしやうむてさくみさる者ハい
婦そとくやくつてんしてくもてやなるかまえ
つ見の於もさしうらけすやなうん
はくりとくはとの志酒見ほくあつのまえ

志んまのちやう於はまとふあなし
よく橋をとめんすらま外あくまと城ってを於
かと云者いまとむなり一代出羽をみれ人品
といふこめんのためやあつはく代志やうとの
や色くのうる路つきそとひく多れ城うの
とふ人もようしなのとしきのことやしやう出山
乃跡ろりいそく一位成色く見んろんほうう
い茶木園出志川のい成ほ若菜ち色ほとけます
なるとあきてしすんまんそいふろりそよみす
むりしくあつたとしやうおあみくさともみふ

なにけしやせいふれとさゝりうそゝと河の辺
たとうたふをまふもけりのしる座なさをる
うきまれをくれなれあゝおもちろれけるの
そしきやく

名如見

お未来生死をはなれまさるむ〳〵ましきさる一念を
なくされせしろもなし三世のりとくなりこ
むせんれはいけくやもなくむかれしい
生いぜんお未来をなくゆあく佛法とやら
いふるすをしらんおろくなしんとおんすへ
のうまふくなふともしらねおくろの御やを
ほしあといふ桶をあるふもあくすなかうも
あくまさるまぬれとつやもなしやもちる
ぬことなり一さい八まんよきやうをみるか

いとまうけし世をらん心をもおもしもなし
もろくみるこゆゑかくおもし事也
はかなふてくものうらへしあらはるゝをも
さとん乃さやうとこのまれもとす
志やうやいふいさつらそのゝ世に出て
おほくのものをあいしすれのぬ
是をおもひ忍ひよしてを衆生をしやう志をさ志
尭に尭ねも名まもまた清ちも清ら
あめつきゆきやくおりとをさつらん
をくれもおすしたふつきのころ

ねれもあれなかきのうくけちやうまうたし
つゐまてさくるへしさくれやともさくしれぬと
しるもしれすか
あらそいつなるそのとりふやらん
すゑとりふきしまるうせ乃ことと
志ぬきてくうくとしてあるやら無みまう
くしてなれやらん
あまのこともなしをひとけ乃末のまそ
そふうぬころれおちもひをなし
とのきさへかつあけてもぬぬくうめう

あくさかりぬくむしようするわざわり
なさけあらのかこ見えり石つなるなりとも
みまんの代てちやうをきれかし
あさましき悪のこゝろにてもかまぬへし
たまりあの世りのありさまへきて
からぬ井りさらぬ水のなまたちて
うけもかこちをなきこゝのうくむ
めふとみくてまをとられぬ月のうちの
うつりのこれきまりうまける
吉活をみるひとこゝのぬとりしき

おもひてしろを一くちりのむ
しやうさんぶいれ雨ぞまりきて佛になると
いふしるしなしとかく不知すわしすれど我
をなし人もかしゝやつみさもみまをりと
を人生をとう無作く拙あくまそ入
我もまうなうけりみち様たつぬまでを
わかこゝろすてたつ子いでぬから
おもひいまをへ人をまちかもようなりけす
おもろのかりふむうろうすけまで
おしんとそけるいてしわれなきをめそ

さてこれもなかにのさとりもなからん
なかるもむなしきゆめときくものを
ゆめぬこころ疑はさはるつね
わかれをいとひてそいつねばるの見と
ひらおもてちりて徒らうつる札

二人ひくに

あるひくに山居してあつまる文むくに来つまて跡
語ことしてつくとやをとうすまきをとうのて
こくのしいくなり給まちらいまつる一大事

のりんえんとえうをひくにとなりふるうひ
さうれなしと思ひ是まてさおりては法をひと
もりてんは悪はやうに流法めしわれといふて
たとへいらくぶつともつれことくなり
うへ悪もつんての者まては法なきうん中
のふかさのこくの中へしぞれ生死をむる
のおんぎんとうつめるかきおまちやくの
悔重ねんまきおこつまでは法のかに世間まちや
くまるなり世間まちやくまるあつろをひかふ
うれをしまつこれからもくするねんを生む是

ひとへに一心ふらんなるいのりをもつはらにする頓
ふ見ざりしはぎやくのんはあさきゆへ縁はし
んをひきつゝ一さいのうけはなれ行くうき世
て方法のみれがたにて志ばじむとおれねらして一
さいのけんぞくこれあつまり摂取の命をとこにして
も浅く不打ちりんせ世をうつしてそうなたり
不打ち摂をしらずしてそのごとく生死にながれて
ら汝支てをも志ゆらさにれりをのいをたへりら
てを人る為にむまれ十のいはたりらて天上に
むまれあれを六たうせいふするのうん不

四生をうくる也て十のいとりふみあれ一ね
むとの色をみるほどもなくさうばちをたくしく見
なくきいろをなしれありきさらはしめをこ
くめつしてさる地けをなく中島ち五経
不もなしされをたくみむちをたこれところ
八十のいやはも海ことかなけきをねらひを
やむつく示さはく流生世なしけきをさしひ
をり趣きせて證をなし為く天うらの雲にこ
とくれの上のりをふかきこつまあくれこれ出の
一念も世なしきゆ色いしふち示乃まんはう

とかくあらすをぬきて一念の外に方法
もなくまんほうのかは一念もなし念と申う
せひとつにしてことごとく世なしきすわ一
さいのものとみるとききみなむかし世ふ新
むかれてこれをむなしゑと世より見のしをむ
なしやうも見もふるとしかとよしやうもおもゆ
見のしをさて一さいの衆生をよしとともあし
ともおもきるこころとよし世み世にす
しそつけうさせんさんし
心ていそくんのけし光をいうれ子そのり

てうや
こたゑいつそくまれらをは女ほんとしうか
してやくんたとくも人の父母いかうちのこと
ちうよをしちくいしをもてひとてすなりあまたを
おくえうよう地ならていまうたき木よほくれ
うこらしちくもとこのあひわふところむうち
のかりよおおとをせてむいつうぞことくんを
いはれすわさ綾をひとしけしのなきとめぞき
を作井うしたきくつきがらとれひもやかて
きゆるすわちくいくもけしめなりつましゆ

色うけぬかむなしきなりこゝろきやまもなく来
のあつかそ右中のひれをゆるすもおく
ふゆるするもかぎりてせくんくうくし
こゝろんにやうしてつく此事をおくあさ
れるもなきさすり
ゆてゆもくなかそのう後生くうわらはや
こた色ていふく人のあつかをえんうまき
ていくゝろそのなりうれこ此心を定うり
あうと思ひてきんわく彼ようあの二川乃ん
とれねらしてんうり的此事彼をよわて

ひくまむ念しんおゝれをさするすとはる
さらてちあくのくさほうとうやしなりされ
もんうりきさうふをもよろこびすんかゆの
まもとをすけりを一さいの事を志つまさり世
あの一大事をあきからあすもまむ念れもや
ひなわも一むとあきらかをむし今の川
見とめけしてあふよのなふへし
ゆていもくいりけるを念心とお中しはや
これ色ていたく海こくめ念んとをたのしけか
あつまてもまさらすす後生かあつまてをれやそらは

生しそふさうを忌しそ行くをいつはる御色
ふかやうなるそといへしめふるそへくよこく
んみりけるも六ちんにれうりしして一さ
いれゑのみが世なしくすりて一いもとく海
らさりけるとみてとたうもんとをいふなり
よりつのの人のさたあなんうちよすわらそし
世とを待るもまたしのことなりまて一さ
いむなしやとも何もひとつまてき事なりむ
なしきおくうならと一さいのものもをこくた
一さいれいろをいれを一さいれいろ紙をれ

是を一さいのいろといたをあくうふまでをなす
ふの田地とそりいふすりいつなり。御色者ふと
いふうまで一さいの草木をみれ地より生
を一さいれい縁をこくつよるといれの御色
そりでのれとへとゆりてかん心い田
地とえしやなり

行く雁木とくさきしみ是を花もなし
　花地をはるのうらうりりそり

あのきのあしろをゆりてもおんし世なし
きらくうよるを一さいのいろと出をそるあく

はるのはなの見ごろあくまで夏秋冬の季来に
いろのうつりかはれるにもしたへし
ゆてりもく出家しろさひするのなまていや
こたゑてりもくそれかしのるすもと御まて
もなきるすなりのこともうましろもそそめて
あかもりちきさこちまかのこともいるうかとなあ
をとそうをひとのつやそうたちてこいし
まそとすへしゆめくたくおゑもいへうか
ぞんむなの僧とく愚うするやうとえれこ一
もんをだふくやうすれもそれしちまかの事

なしと也ふ又出家もきやうをよみん海うじや
をたすけだむをとはくのりんとすろうするも
ぶむかをぬおくえりれいへし
みとうさていりやうゑれんなまをし
ゑうべきや
これゑていもくされおかんやうおだかんの
く御うばうをへしある人いふもく御これた
めなをあかすまうしやのたかよきやうをよ
見さかなところへしそうやうないふ人のく
御うときやう王らふとすんてわたらいたあ

わかこゝろの源とさとりぬれハ一さいしゆ
生とみなくへしぱ此故にこゝろはらを海うしや
のかなしみにしたかひすいつれろ中色そとし
ゝ色を一さいのれほとけも衆生とゝしみなまよ
法しなる中色なり
みいふろさいのことおをくれさきしびらん
のきみくぞうやもちうつきしみよるそのれ
悪めて一さんの法つくる一大事のいをし
またいふてきりすれ中色なり
心にいつもく人の死ハ時をいつやうに成らや

これ色てハ四大とわかてりへし此すなハち四大
といふハ地水火風なり人こゝにあきらかにしれ
まよるをなしされハいふハ風かのあゆくの
なからひかれうけなひのあるを氷なりあの
かやうもしらけ見るして法界をしらと
なる此阿迪にてしらくまれとめなし四大にて
うを色をとみるときをうるりつゝまる名や
人ゆゑ生れ因よる生海ゝひのこゝめとえ道を常
住すりとみる中色あり如此よみさま
なふこゝりをみなはけよる世界の世界中に

しめうといふもまことなりねも
あれと不生不死のくすりをいふなり
ゆゑにこくいりなるとまことの佛法と申はや
こたゑていはく法法と志法のすることに法法
をおらふまさめしたりつひがるとやあれ
なりひのことといふものにごかん志やうの
まおはいふなりのめひとをさよひさごつまと
もさとるれと衆生とも佛なり迷悟ひを
やむきてとのいりのかなつちうつくはい
さられのひともさよひをいそしむさとるをとう

らゑをかんぬとまれなくかとけとりとむる
んありあの四おはり法をられてかんかんの
ほとけをとくますまするおかのほとけをと大光
明遍三まいせいひまさあんかうの弥陀も
いふ我も心源とをいふかんらいのめんそく
なとく中ーもみれあれかん心むの田地の名
なり一さいのいろてるあるそのもみれなな
なりの色をへし一さひのいろかさらまを
のいは海こえむの一念より生してなことふか
これそのふかくすみなるのちをなる相するなり念唯心

人おのまとまりもしてうゑうしりゆくき
ぜんすゝさんによりておこれねんもみん
かかしもかあつさる事とむらん出一さい
のこと源ももさるとさうせもひ海よ
ひれうねんをれてゆしとうちはつひくか
かるりも打ももぬものかならんそてもあし
まゆうれきもうくとしてねぬろまうの
孫てわてうひもうさる事れ出来る打き
をざ中かりしくる事かれて是もよろこ
とやらぬとさうひみねん乃れこれとれを

よ人のことしをこゝあむうしてあまうして
海う孫んをさけんとする人のりこ人乃
こうめんと人よあたふれ事そぞやうの用
うしをあうもすあく故事をしらさる人まこ
人乃おかそうれひとれの酒故りなる
ゆゑうこ人のやうかりふやらぬもうさう
もしめてあまとこうあむうてぬもんと
とほつてわん心よ不すしためんためなり
此所とさくてめいこわれぜひのんとやめも
そのりうかかんよちの際くへし男おてれ也

このまくぎんがしぎんなのまくまては方便
をあらわさとき道なれるすとしつまてみらくの
なかのそのそむ承なく衆生をきやうとする誠を
火中きんけるたとへて善男子善女人とほと
なあれとかめ諸ふこの名よくも無へんり
よろて出く子ゆゑなきことなしみなまかろ
志なきしいとふ趣さきことの方もよろも
なかや是福のさか済しの方とりてい化生
もてしめつうふるすといましめてぞ徳くの
きやうか興さぬふをはぞし色のことくまそな

なしてあさけさへこのきやうとよみて方を
いれれそのりてのほしあれ済こころなかり
なふつかやたとへ人の太るすとふるまひ
まえし下人まうはさてんまもこの下
すんとんこんなしてかえの閑るす誠を志
らはしそごれと海い田とをいてしてまさか
へしく文字誠うろへ田とくろとをもいの
てのろれめしれんうろねりんやなけくぬ
しのんかれぐふへし娘つほうも又のくの
ことくいさ呵きやうをよむ人をみ進そその

経のうへのことくまなびあらはさずしてたゞ
とけのいましめれまふ名利のためにあのさ
やうとよみて媒つちん紙を四してまつり
てどのところにてまつりいりて佛の法ん
ふ家なふへさがやのやうの人のこころにん
してゆくそなんちうすかる家ぶてんうそば
ほうにろむくろす紙もろろん座禅ま三ね
いのろーるんあるといふ事ーぞ流生をとん
あんまりーくどむ三んちの三の空つあ里ま
まで地おくそりおい紙とすけえぬふとこ三

禅門のくるしみあまをいふなりとむときを
むさぼれるんとをいりつゝ地ぢくゝにおちるす
なり媒川ほうとしゐらずしてあの三のむとされ
あをといふあしめ禅ふすりつゝされの人の道
ハとすとてもみな媒川たんの法むすうむく
事のぞやされも是禅す人の中なるの
思ふやうすりれをぬき紅禅の佛こころふ
法うあなさゆゑなりつやうの人のおいいれ
とえんするとも紅禅の用事をもつあすまくす
のためあるめ媒川ちんをえんするとものを

ほとけのしこかゝりてまれらは佛法をきく
あきらかにして生死をはなれきんるをもひとへ
に佛の法をきんにあしかすやはかうきんのため
にあらいをいとおきし海ことに佛神を信
する人とかやうやうの理り我をえるをして
生死をはなれくりをしらねんをもせくして
んのまくろしめるたのひたまふ人悪も老お果
会ろして出家のまか入ぬきとまくまをしてこく
うけのせめのうれのしりなるをちはくに
落へしうきかちくえやう志の羅人天六道の経

をみれ我人を海ことをりあつりと思ひ給をは
よろてするりはなの心も海か誘しれめくかき
をすへてさことおもしと思ひて一さひのこと
とおをやもみかあれまか法の世と思へし
もしらのおもしんもえんにあつまやおりく。一さ
いれ善あんみれ了ん忘れこをしなりへし。
山てゐくごろに大なる悩をんおつま給ゑ十年
の為せいほうえのをし一への本くにえ給ぬ
きんとすれを給さひとにとれなふはしめよ
つまれはつまますて一字をもせつをとめさまひて

一枝の花を拈じて大衆に見せしめたまふ
かせうそんじやゑみわらひ給ひしそいの
やうなる故ぞや
こたへて云くならはし五十年ほどをいはうもだ
じんをしていさとうんとするにちらうのうすを
かう法よ猶れあることといひて法うつあて
いたくうことし五十年の世にはうをあらはさ
てれさなれその法をうすうことしあの由色
ふもうでんといふ佛の不せう葉者に傳へ
給ふ所の法をもそのれさなさとのをいはさ衆

るを也とあり花のれに此花の心をも方便を
ほれたる人さにもあしらす心をも傳えそうう
ひたる人さするもあしらすくちとそいてもたれ
趣さむもわしらす口をとうもしてたゆ
するとわすとかとるまでさせんしも法
るまでなしくちとるまで人に心へしおのん
とたら無とれもして一さいは不まくさても
佛の心を給ひし花とりせうまらひさひ
こゝろもいりぶんふもみるへしはいいれ
とたられも一さいのはえをしまるまうも世

よの中の禅をまなふ人といふとも仏法者
といふ道のことをききてもあれ三世の諸仏
如来のことくなく一代の法をときたまふとも此
花のいひをききてまよふ二十一そたうとの六祖まで
師の相承一大事とかや一大事
といふ道をしらせんとて人のためにときたまふと
一大事をいふやうはこゝろの道しるを一大
事といふものは我か身の田地なり我か身の田地を
きくのみならずとなりのみれもさとりおく
ものことくなれ禅すれともくうのことくなれ

我身の田地を一さとりみせ[illegible]
多く一大事とこゝろ得世ほとい二一さいの
いさうらうすとやめてあまたとたつねへしけ
花のいつれとたつきん人を一さいれその
みなは法なる道なりいさうらう一禅
をなしこれとこゝろる人をも禅つほうと思ふ
もいさうらなる道しく

純一休

110X
119
1